六字城

発行　真宗大谷派（東本願寺）天満別院
大阪市北区東天満一－八－二六
電　話　六三五一－三五三五
代表者　輪　番　長谷山法雄

「和讃のおはなし」

真宗大谷派　鍵役
宣心院　大谷　暢文

『現世利益和讃（一）』

阿弥陀如来来化して
息災延命のためにとて
金光明の寿量品
ときおきたまえるみのりなり

（阿弥陀さまが、お釈迦さまのいらっしゃる娑婆世界に来現して、息災延命の利益をお示しになるため『金光明経』の「寿量品」をお説きになりました。）

親鸞聖人は、念仏者の利益を現益と当益の大きく二つにお分けになりました。現益とは、この娑婆世界において正定聚の菩薩の位に入ることであり、当益とはお浄土において仏となることです。今ここでは『金光明経』によって、念仏者は「息災延命」ということを取り出して、わざわざそれをお願いしなくても、信心決定して念仏を称えるところにおのずから「息災延命」のような現世利益があらわれてくることが明かされているのです。

『金光明経』「寿量品」という経典の舞台は王舎城です。王舎城に妙幢菩薩（みょうどうぼさつ）という菩薩さまがいらっしゃり、この菩薩さまはお釈迦さまのお説教をよくご聴聞されていました。お釈迦さまが八十年のご生涯を閉じられてしばらくすると、妙幢菩薩は「お釈迦さまは他の命を害することもなく、他に食物などを多く施されたのに、どうしてご自身は八十年という命しか保持できなかったのだろうか」と疑問を持たれました。すると突然、四方から四仏があらわれ、お釈迦さまの寿命は無量であると説いたのです。その中の一仏が阿弥陀さまです。ですから親鸞聖人はご和讃の中に「阿弥陀如来来化して」と詠われたのです。

「念仏者には息災延命の利益がある」と『金光明経』「寿量品」には説かれていますが、ここでの念仏者とはもちろんお釈迦さまのことです。ただし、お釈迦さまは息災延命の利益を得るためにお念仏を称えたのではありませ

五月の法座・行事

十二日・蘭如上人御逮夜・常永代経（午後一時）
十三日・蘭如上人御命日（午前八時）
十四日・同朋の会例会　大阪教区第七組　長教寺住職　稲垣　洋信　師（午後三時）
二十二日・常如上人御祥月御命日（午前八時）
二十四日・正信偈書写の会（午前十時）
・定例法話　大阪教区第十三組　心願寺住職　松井　聰　師（午後一時半）
二十七日・宗祖聖人御逮夜（午後二時）
二十八日・宗祖聖人御命日（午前八時）

大信心は
仏性なり
仏性すなわち
如来なり
（法語カレンダーより）

編集後記

先日、南森町にある造幣局の桜を開門二日目に見に行きました。その時は、しだれ桜がまだつぼみのものが多く残念でしたが、造幣局の通り抜け期間が終わる十七日頃には、敷地外から見ても桜が満開の様子が伺え、感動しました。これから次第に暑くなっていきます。皆様、体調管理にはお気を付けくださいませ。
堀河

霊園・墓石
株式会社太田石材店
本社
〒536-0001
本店　大阪市城東区古市1丁目23番20号
〒530-0042
大阪市北区天満橋1丁目2番18
TEL 06-6930-5075
0120-30-5075
FAX 06-6930-5078

ん。お釈迦さまのご生涯は八十年。妙幢菩薩がおっしゃっているように、決して長いご生涯ではありませんが、阿弥陀さまをはじめ、四方の仏がたがお釈迦さまの寿命は無量だとされたのです。お釈迦さまは八十年のご生涯をかけて仏の教えを説かれ、以来二千五百年以上も経た現代の私たちが、このお釈迦さまの教えを聞き、これからもその教えは後世に生き続けることでしょう。そのようなことから、お釈迦さまのご生涯は八十年ですが、その寿命は無量であるということがいえるのではないでしょうか。

私たちも本当のお念仏に遇い、お念仏の生活ができたなら、その人生はおのずと「息災延命」といえるのではないでしょうか。医師の世話にならないことが「息災延命」ではないのです。お念仏に出遇え、輝ける人生こそが「息災延命」なのです。

◆別院墓地のご案内

現在、天満別院では真宗のご門徒の墓地使用者を募集しています。

冥加金、申請方法等、詳しくは別院寺務所までご連絡ください。

尚、収骨等の儀式執行は別院職員が執り行います。

◆正信偈書写の会より

毎月二十四日午前十時より天満別院一階会議室にて正信偈書写の会を行っております。書写用紙は別院で用意しておりますので、筆、墨、硯は各自でご用意ください。

◆仏前結婚式について

天満別院では仏前結婚式を随時受け付けております。寺院関係の方々ばかりでなく、ご門徒の方々の挙式もご遠慮なくお申し込みください。詳しくは別院寺務所までご連絡ください。

◆同朋大会開催のお知らせ

左記の通り第四十三回大阪教区同朋大会が開催されます。

日　時　五月二十日（土）
午前十時～午後十二時三十分

会　場　難波別院　本堂
※現在山門工事中のため、出入り口が南側に変わっております。

テーマ
現代の危機を親鸞聖人に問う
「満たされて　生きるには」

講　師　真宗大谷派僧侶
フリーアナウンサー
川村　妙慶　氏

参加費　お一人様千円

輪番雑感

秋より春、五月に運動会を実施する学校が増えてきたそうだ。以前、朝日新聞「天声人語」に記載されていた、運動会の閉会式でのことを思い起こす。

『初めて校長になったのは、新潟県の農村の小学校だった。就任後まもなく運動会があった。開会と閉会のあいさつを原稿に書いて覚えた。閉会式の時に登壇して子供達を見回したら、胸のリボンが目についた。一等は青、二等は黄色、三等は赤、一人が三回競技に参加したので、リボンを三つつけている子がいる。二つの子、一つの子、おやリボンの無い子もいる。あいさつをやめた。「リボンを三つつけている人、手をあげなさい。はい手をおろして、この人たちは大変がんばった人です。その場にすわりなさい。」次に「リボンを二つつけている人、手をあげなさい。はい手をおろして、次にがんばった人たちですわりなさい。」「リボンの一つの子たちもがんばりました。」とすわらせた。立っているのは、リボンの無い子ばかりである。「いま残った人は一生懸命やったけど、もうすこしのところでリボンがもらえなかった人たちですね。校長先生が心のリボンをあげます。さあ、投げますから空中で受け取って胸につけてください。」と言い、リボンを投げるまねをした。立っている子たちはそれを受け止め、胸につける動作をした。拍手が起きた。つぎの年の運動会直前に訪ねてきた父親がいる。「うちの子は走るのがおそく、去年の心のリボンは初めて頂いたリボンです。やめないでください。子供が喜んでいる」といってきた。その次の年もつづけた。豊かな物の中で暮らしている子供達が気持ちだけのリボンを喜んでくれたことが大きな発見でした。』と校長先生は言う。

優れた子はよく目にとまり易いがそうでない子は見忘れられ、置きざりにされがちです。みんなどの子も尊いのちを頂いたかけがえのない一人一人です。みんな平等のいのちを頂いて生まれています。人間の勝手な物差しで優劣をきめていることが問われます。